

佳作

「僕の大切なエネルギー」

新潟県立直江津中等教育学校

2年 大谷 久人

僕は、5歳からアイスホッケーを始めた。きっかけはアイスホッケーの体験会。「5歳児がスケート靴を履いて歩けるなんてすごい」とほめられ、スケートをするのが楽しくて、毎週リンクに連れて行ってもらった。母から聞いた話だが、オールドタイマーという大人のアイスホッケーの大会で高齢の方々が楽しくプレーするのを近くで観ていて、「僕、じじいになるまでホッケーしたい」と言って、大人たちが大笑いしたそうだ。この時から間違いなく、僕のアイスホッケー人生は始まったのだと思う。自分のエネルギーを存分に注ぐことのできるアイスホッケーという競技に出会えたことに感謝している。

僕は小学校6年生まで上越のチームで練習し、試合や全国大会に出場してきた。全国大会に行くと、自分以外にもこんなにアイスホッケーが好きで一生懸命頑張っている仲間がいることに驚く。小学2年生の全国大会で出会った仲間は、今でも友達だったり、戦ったり、同じチームで練習や試合に臨んだりしている。「毎年進化している」「どんな練習をしているんだ」と、うらやましくなるほどホッケーの上手な友達もいる。

今は、スマホのラインやインスタなどでつながることも簡単だ。これらを通じてどんな練習をしているのか、敵チームの試合結果など、多くの情報を得ることができる。遠く北海道で行われている高校生の試合もライブで見ることができるのだ。母は、「いつまでスマホ見ているの」と言うが、これも僕にとってエネルギーを得る大事な時間。仲間の頑張っている姿を見たり、憧れのチームの試合を応援したりするのは楽しいし、同じ思いをもつ友達がいればいるほど自分も頑張れるのだ。

中学生からは軽井沢のチームに入り、長野県の選手として活動している。中学1年生の4月頃は、中学生のスピードに慣れず、激しいボディチェックを目の当たりにして、正直恐ろしかった。がたいのいい選手が体と体をぶつけ合って倒れる姿を何度も見た。監督も「1年生の初試合は怪我をしないことが目標」とアドバイス。どうすれば怪我をしないのか分からないままリンクに上がり、パックが自分にきてもすぐ放して逃げていた。小学生とは、スピードもボディチェックがあるところも全然違った。こんな感じで僕の長野でのアイスホッケー生活が始まった。

アイスホッケーは、氷上の格闘技と言われるスポーツ。まさにエネルギーと

エネルギーのぶつかり合いだ。だから、まず自分がエネルギーを満タンにしていないと試合にならない。食トレや動画を見ながら筋トレをしている。体も小さいより大きい方が有利だ。また、アイスホッケーはフォワード3人、ディフェンス2人、キーパー1人の計6人で戦うスポーツだ。スケートで滑ったり止まったりしながら、スティックを使って一つのパックをゴールに入れる。エネルギーを一瞬で使うため、プロの選手でも1分未満で次の選手に交代する。スムーズに流れるように交代し、エネルギーを貯めながらまたすぐ出場する。

そしてアイスホッケーは個人のエネルギーだけでなく、5人の連携が非常に重要なスポーツでもある。仲間とのパスや誰をマークするかなどを瞬時に判断し、それを5人で共有することでプレーが続いていく。「後ろいるよ」「空いてるよ」「前いけ」「自分で打て」など声を出すことで連携が取れ、ゴールが生まれる。

僕のポジションはディフェンスだ。ディフェンスは、後ろの位置にいるので全体がよく見渡せる。冷静に敵の動きを読んだり、攻め始める時に攻撃を組み立てられるのが面白い。ディフェンスは、相手の攻撃の勢いを止めたり、パックを奪い返すために、体をぶつけることが主な仕事だ。だから、パックをキープするための体の使い方を先輩や監督に教わり、上手になってきた。また、僕のチームは先制点を取ると、みんなのエネルギーが爆発し、得点を重ねて勝利することが多い。一人一人のエネルギーが合わさって大きなエネルギーに変わって得点が入ることもアイスホッケーの楽しさだ。そして、5秒あれば1点入ることもあるので、最後の最後まで集中していないと負けてしまうこともある。

僕のアイスホッケー人生は、5歳のあの時「じじいになるまでアイスホッケーをする」と言ってからまだ9年しか経っていない。でも、9年も好きなことをずっと続けてきて、アイスホッケーを通じて学んだことはたくさんあり、アイスホッケーと共に成長してきた。僕のことを応援し、支えてくれている家族に感謝している。また、監督やコーチ、仲間との出会いがあり、今の自分があるため、今後も出会いを大切にしていきたい。これからもアイスホッケーが大好きな仲間と共に、エネルギーを注ぎ込み、成長していきたいと思う。